
血に汚れし者

道標

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血に汚れし者

【Nコード】

N8234C

【作者名】

道標

【あらすじ】

殺し屋の願いは、学校に行きたい！？元殺し屋の終しゆの学校生活！
！魔法有り、超能力有り、甘酸っぱい恋……………多分……………有るかな
く？そんな生活。（になる予定）

第一話 6年前の仕事 上

此処は都内でかなり有名な東京タワー展望室。普段ならば人が大勢要るのだが。今この場に生きてる人は、三人しか居なかった。

そのうちの二人が拳銃で武装していて、最後の一人は10歳位の少女だった。

その少女は気絶していて、ロープで縛られている。下からは、パトカーのサイレンの音が聞こえて来ていて、警察官らしき青い制服を着た方々が忙しそうに走り回っているのが見える。
すると、二人の内一人が閉ざしていた口を開いた。

「なあ、銀行強盗やったあげく、逃げ場に困り東京タワーに逃げ込んで。1人の人質を残し、後の奴らを皆殺しにしちまった銀よ。これからどうする？」

「……おい！まず言っとくが俺は銀次だ！面倒だからって略すな！それに……やたらと誰かに説明してるみたいな口調だな？それから、これからどうするかなんて知らん！なるようになる！」

「そんな、酷いよ」

「酷くないし、何とかして逃げたいがな。まあ、警察の方は圧力を掛けさせればどうともなる。問題なのは、裏の奴らが動かないかな。それと……そのひ弱そうな言葉使いは止める、聞いてると気分が悪くなる」

「うわ、ひどっ……まあいいや。それよりも助かったら、この金どうする。分け前は折半で良いよな？」

「……ん。そうだな〜とりあえず妹の手術代分貰ったら、後はお前にやる。」

「え？マジ！？やったね、ラッキー」

「まあ……助かったらな」

ロープで縛られている少女の事を無視して床に置いてある大きめの鞆。

正しくは、その中に入っている大金を指差しながら二人は話していた。

一方その頃。

下の警察官達は皆が皆何かを待っているような感じで一つの携帯電話を凝視していた。

そんな警察官達の願いが通じたのか、はたまた、ただの偶然か。携帯電話が軽快な着メロを流し始めた。

電話がかかって着たのを確認したスーツを着ている頭がちよつとハゲかかった、中年のお偉方が警察官達が見守る中、携帯電話を取った。

「あつあの？そちら、克無でよろしいでしょうか？」

ハゲかかった中年が話し掛けるも応答は無し。だが携帯を確認してみても、電波が悪い訳でもなく携帯を逆さまに持っている訳でも無い。

中年が一体どうしたことだろう？私になにか気に触るような事を

したのか？と戦々恐々としていると。

「……………あ、あ。テスト、テスト……………うん、大丈夫みたいだね。えーこちら克無」

携帯電話から流れてきた声は、20歳位の青年の声だった。

だが中年は、あらかじめ

知っていた用であくまでも、淡々と

「この度、裏の構成員の暴走行為。どのように責任を取るおつもりですか？」

「ん、その件に着いてはこちらに非が有ることを議会が認めた。故にそいつらの始末はこちらがつける事になった」

「それはまあ、裏世界の住人は、同じ裏世界の住人がかたを付けるのは解りますが。可及的速やかに犯人を始末してくれると助かりますが……………出来るのですか？」

「ん？何故だね」

「今回の犯人は、こちらの持っているランキングではトップクラスの元傭兵。水瀬銀次と相棒の斎藤武ですよ。……………いくら何でも、そう簡単には行かないでしょう」

「……………ふっ」

「なっ、何故笑うんですか！？」

中年は、この二人の強さを知っていたので忠告の意味を込めて言

ったのだが、鼻で笑われるとは思わなかったので多少気分を害した。だが、少し気になった所がある。それは、この二人の名前を聞いても揺るがない絶対の自信。

「大丈夫。この程度の者等、私の組織の闇。……ああ、闇と言うのは殺し屋の事でして。その闇の中でもとびっきりの闇がすぐ近くにいますのでそいつに向かわせますよ。そいつならば楽勝です」

多少納得がいかなかったが、考えても仕方がないので。

「わかりました、ではお願いします。……ただし人質には、掠り傷一つ付けないでいただきたい。それがこちらの要望です」

「ん？何故だ？」

「人質は、日本に来日中のアラブ石油王のお孫さんなのです。もしも、傷一つ付けたら日本は石油が中東から輸入出来なくなってしまうからです。」

「ん、了解した。そう言っとくよ」

電話が切れたのを確認すると携帯を置き、周りの警察官達に指示を出し始めた。

終わると近くに有ったパトカーに腰掛け、独り言で

「まさか、本当にあったあつたとは。ただの噂話だと思っておつたのに。世界最強の殺し屋派遣組織……克無か……」

そしてタバコを取り出し火を付け、眼を閉じた。これから犯人の身に降り懸かるであろう、惨劇に眼を背けるように。

此処は東京タワーのエレベーター内。そこに、10歳位の一人の少年が立っていた。

少年は腰まで届く黒く長い髪を、首の後ろ辺りで一つに縛っており。顔立ちはまだまだ幼さが残るためか、カッコイイと言うよりはかわいいに近い顔立ちをしていた。少年の乗るエレベーターは、徐々に犯人の待つ展望室に近づいていった。

少年の服装は、上下黒のシャツとズボンを身に付けていた。

だが、その少年の手には。黒光りするガントレットと呼ばれる、西洋の籠手が付けられていた。

少年は、ガントレットの付け心地を確かめるように手を握って、開いて。握って、開いて。を、繰り返ししていたが。エレベーターが展望室まで後少しの所で、手を広げたまま力を抜き前を見据えた。

その頃、銀次と武は気が気じゃなかった。エレベーターが上がって来ているのだ。

もちろん二人は腕に自信があるし、警察官なんぞに負ける気は無いが。

そもそも、警察には圧力が掛かっているから人質に被害が出るかも知れない突入なんて、やりたくとも出来ないだろう。だがもしも、犠牲覚悟の一斉突撃でもやられたら、勝ち目は無い。

しかし、もしかしたら二人は運が良かったのかもしれない。銀行から大金をせしめとって追い詰められたのは、不運だったが。運よく石油王の孫を人質にとることが出来て、しかもその石油王が孫を溺愛していて。警察に圧力をかけていて、エレベーターに乗ってるのが少年だとなれば、運が良いとしか言いようがない。

だが、運が良い一方で運が悪くもあつた。

その少年は、警察が圧力を掛けられて動けないので裏の住人それも裏の住人の中でも関わつてはいけけないとされる、世界最強の殺し屋派遣組織【克無】から派遣された殺し屋だったのだから。調度エレベーターは、いま二人の元にたどり着いてしまったのだから。

そして

エレベーターが展望室に着いた。

軽やかな音と共に少年が姿を現す。

もしも事情をするものが居たら眼を背けるだろう。裏の住人、その中でも敵に回してはいけけない者達がいる。

その筆頭である、克無の闇。しかもその闇の中でも、特に敵に回してはいけけない存在である二つ名持ち。

それを敵に回してしまったのだから。

第二話 6年前の仕事 下（前書き）

学校が忙しく、遅れました。今後も更新は、月一位になりそうです。

第二話 6年前の仕事 下

軽やかな音と共に、エレベーターの扉が開いていく。

現れたのは、黒い服を上下に着込み。黒光りするガントレットを身に付けた、10歳位の少年が一人。ただそれだけ。

他にも誰か居るのではないか？と思い、装備している銃器のAK47、カラシニコフを構えながら、注意ぶかくエレベーターの内部を覗いて見て見るが、どうやら少年以外誰も乗ってないらしく少年が降りた後に扉を閉めて一階に降りていった。

やって来たのが10歳位の少年が一人なので若干警戒を解き、銃を下ろしながら少年に話を聞いてみる。

「……なんだ？坊主。何処から来た？」

「……………」

「……ちつ、無視かよ。なんなんだ？このガキ。…なあ、銀。こいつ何だと思う？」

いきなり話を振られた水瀬だが、ある程度聞かれる事を予想していたらしく。

「…さあな？ただ……………ただの迷子って事はなさそうだ」

「だよな……………おい！坊主、何もんだ？」

「……………闇……………」

さっきまで沈黙を保っていた少年が答えたのには少々驚いたが、少年が答えた答えが気になった。

「闇？何だそりゃ？なあ銀、お前闇って知ってる？」

「闇か……………確か前に、傭兵仲間に聞いたことが有るような気がする……………って！お前、一緒に聞いてたんだから覚えてないのか！？」

「ん……………わかんね。全然覚えてない」

「はあ……………全く。」

相棒がこんなにも物覚えが悪いことに呆れ、ため息をつきつつ。

自分が覚えてる事を話すとする。

「確か、闇ってのはどっかの組織が使ってる殺し屋の隠語だった気がする。どこの組織だったかは思い出せ無いが……………」

「…だとしたらこいつが殺し屋か？こんなガキが？おかしくね？もしも、それが本当だとしたら。何でこいつは、俺らがこんなにも隙を見せて喋ってるのに殺さないで待ってくれてるんだ？」

さっき一言つぶやいただけでまた黙り込んでしまった少年を、指差しながら斎藤は、微かな違和感を感じていた。

それは様々な戦場を経験した事によって身についた、ある種の第

六感とでも言うべきもので。微かにだが空気の流れが変わった事を
感じ取っていた。

どうやら水瀬も同じようでAK 47、カラシニコフを構えなが
ら少年を観察する。まるでどんな些細な動きをも、見逃さないよう
に。

敵の元傭兵二人の何かを探るような目線の中。少年は少し、警察
が聞いたら速攻で止めてきそうな事を考えていた。

（はあ……少しめんどくさいな……人質無視して展望室ごと吹き飛
ばしちゃえば良いのに）

（何で、爆薬で展望室爆破！とか、魔術でタワー事消滅！とか、特
殊部隊一斉突撃！とか、やらないんだろ？その方が楽なのに。や
ってくればお昼ご飯我慢してこんな所に僕が来なくとも良かった
のにな）

（しかも、今回の仕事は給料無し。武器弾薬実費って本当にケチだ
な。せっかく出来たって喜んでた彼女の誕生日に、金が勿体ない
なんて言ってるケーキもプレゼントも買わないから

『この守銭奴!!』

なんて言われて振られるんだよ。全く、振られた次の日に俺は金をバンバン使うぞー!!なんて叫んでた癖に使わないで貯め込むから守銭奴って呼ばれるのに。そこんところを理解してくれないとね。まあ、僕は銃を使わないから出費はしないけど。その点、信さんとか神楽さんとか大変そうだな。銃弾バンバン使うし、やっぱりそうゆう所が似てるんだよね。やっぱり双子だからかな?)

自分の組織のトップに対して随分と心の中でぼろくそに言い放ちながらも、同じ職場の個性的な双子の事を頭に描きながら、敵の事を観察する。

(うーん、こんな相手にしてもつまらないし。とつとと終わらせて帰ろうかな)

いい加減、動かないのに焦れたのか斎藤が銃を構え直し、引き金に指をかけた。

(武器はやっぱり……)

そこまで考えたところで、斎藤が引き金を引いた。

ズダダダダダダダ!!

いきなりのフルオート射撃。少年は避けられる筈もなく。

その次の瞬間には銃弾で身体をえぐられ、己の血で身体を真っ赤に染め上げた少年が倒れて……………

いなかった。

少年を貫き真つ赤に染める筈だった銃弾は、少年に当たる以前に銃から放たれていなかった。

否、放てなかった。

引き金を引いた瞬間。目に見えない斬撃が放たれて、銃や弾薬、銃を構えていた腕までもが綺麗に細切れにされた。

「……………なっ！？大丈夫か！？斎藤！！……………有り得ねえ！？何しやがった！？」

予測不可能な事態にショックを受けながらも、水瀬が仲間に確認を取る

「ぐっ！ぐあああああああ！！！！」

斎藤は返事どころでは無いらしく、斬られた右腕を押さえ歯を食いしばりながら、痛みに耐えていた。

そんな中、少年はたかが腕一本失っただけでパニックになる二人を見ていたが、見るのに飽きたらしく。

「…早めに終わらせてあげるよ。……なに、すぐに楽になるよ」

少年に尋常じゃない恐怖を感じた水瀬は

「何なんだよ！？お前は！？この化け物！？」

水瀬に面と向かって化け物扱いをされたが、たいして気にしていないらしく。

「いいでしょう。僕が何物か、どうせ死ぬ貴方達だ、その質問にはお答えしましょう」

言い放ちながら、ゆっくりと二人に背を向け

「僕は、殺し屋派遣組織【克無】所属の二つ名持ち」

そのままエレベーターのボタンを押し

「神咲終^{かみさきしゆう}。二つ名は、殲奪者。」

エレベーターの扉が開き、乗り込む。

「世界を滅ぼす者。故に君達の命を奪う者。……さようなら、弱き者よ」

エレベーターの扉が閉まり始め。徐々に徐々に少年が見えなくなっていく。そして扉は、閉められた。

「何なんだ、今のは？……俺達は、助かったのか？……助かったんだ？……やった、助かった……」

「……助かった！！やつ……」

それが水瀬銀次と斎藤武が最後に発した言葉だった。

生き残った歓喜から。瞳から涙を流しながら生きている事を喜んでいる時

次の瞬間。二人を襲ったのは、再びの見えない斬撃だった。二人は不可視の刃に細かく寸断され、何故死ぬのかわからない内に自らの血に沈みながら、絶命した。

後に警察の鑑識は、悩むことになる。

二人は何故死んだのか？また、二人は何によって細切れにされたのか？

それは、誰にもわからなかった。

ただ、三つだけわかるのは。

一つ、これをやったのは、あの少年だと言う事だ。

二つ、あの少年は魔術を使わなかったらしく、実際のところはわからないが少なくとも、少年の力は最低限Aランク以上である。

三つ、克無所属の殺し屋は、とてつもなく恐ろしいので、絶対に

敵対してはいけないとゆうこと。

ちなみに皆に忘れられていた人質の少女は、一度眼を覚ましたのだが、細切れにされた犯人を見る事になってしまい再び気絶してしまった。その後警察にきちんと保護されるまで気絶していた。

少女は記憶を、魔術で消してもらったまで肉料理を食べられなかったらしい。

一方帰った少年の方は

（今日のご飯何にしようかな？食堂で焼肉定食か、すき焼き定食のどっちかな。）

と、悩んでいたらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8234c/>

血に汚れし者

2010年10月10日04時43分発行